

# 「あ！萌え」の構造：序論

(3)

応用人間科学研究科 齋藤清二

## 13. 「萌え」とよく似ているが 区別すべきものの候補 (2)

前回、「萌え」と似ているが区別するべきものの候補の第一として、「性欲」を取り上げ、なぜそれを区別すべきか、ということについて論じた（…結論は歯切れが悪かったが…）。そして、第二の候補として「恋愛」を取り上げると予告した。え、そんなことちっとも覚えていないって？ いやそれならそれでいっこうに差し支えはないですよ…で、予告しておいて言うのもなんなのだが、「恋愛」と「萌え」が異なるものかどうかを論ずるのはかなり難しいと思っている。

というか、ついさっき気づいたのだが、なんと私はこの連載の冒頭（齋藤，2016，対人援助マガジン，vol. 21:181-193）で、すでに以下のように書いてしまっているのを発見した！（←他人事みたいに言うな）

もちろん、「魅惑される」という言葉で扱おうとする現象を外延設定（扱う範囲を決めること）しておくのは大切だが、けっこう難しい作業だ。ここで扱いたいものは、もちろん特定の対象に限定されるものではないので、かなり広範（欲張ればあらゆる対象）にあてはまるような外延を設定したい。

**異性を対象とする場合の「恋愛」という現象は典型例として当然含まれるが、「一目惚れ」とか「憧れ」とか「胸キュン」などといった、もつとずっと広範な現象を含むものである…。(p182)**

つまり、ここで私は、「恋愛」という現象は”典型例“として「萌え」の中に含まれるということ、すでに明言してしまっている。それにもかかわらず、恋愛を「『萌え』とは区別すべきもの」として論じようというのだから、これはどうみたって矛盾そのものではないか。この事実ひとつをとりあげてみても、この「あ！『萌え』の構造」なる連載が信用できないものであり、その著者が実にいいかげんな人間であるということは一目瞭然ではない！…ということでこれ以上論考を続けることは即刻止めるべきなのだろうか？

もちろん、そうではない（と居直ってみる）。実のところ、この一見区別できそうもないことをあえて区別してみようとする、さらにはそのような作業をすることの意味を詳細に論じようとする試み自体が、この課題の複雑さと困難さだけではなく、この課題の大切さそのものを示しているのである。え、何を言っているのか分からないって、そう、そのくらい難しいことなのですよ、これは。そこで、本論に入る前に（…とまたまたもったいぶってみる）、まず、「萌え」と「恋愛」がいかに深く結びついているかについ

ての例を示してみたいと思う。

みなさんは、モーツアルトの最後のオペラ作品である「魔笛」をご存じだろうか？ この作品は、1971年にウィーンで初演された全二幕のジングシュピール（音楽の間を台詞でつなぐ形式のお伽噺風の歌劇）であり、200年以上も全世界で上演され続けている人気オペラの一つである。

「魔笛」の物語の主人公は、タミーノという架空の国の王子である。彼は旅の途中で大蛇に襲われ、危いところを、夜の女王の三人の侍女によって救われる。三人の侍女から夜の女王の娘であるパミーナの美しい絵姿を見せられたタミーノは、一目でパミーナに激しい恋心を抱く。そこに夜の女王が登場し、娘のパミーナがザラストロという極悪人に誘拐されてしまったことを切々と歌い上げ、もしタミーノがザラストロを倒してパミーナを救い出すならば、パミーナは永遠にタミーノのものになると伝える。なお、この夜の女王のアリアの雰囲気味わいたければ、著名なオペラ歌手による歌唱がYouTubeなどで簡単に聞ける。その中でも著者としては初音ミクによる以下の歌唱をお勧めしたい。（だまされたと思って聞いてみてほしい）

（[https://www.youtube.com/watch?v=g1YQ\\_xjlycI](https://www.youtube.com/watch?v=g1YQ_xjlycI)）。

話を戻すと、夜の女王のアリアに感動したタミーノは、パミーナを救い出す決心を固め、侍女から動物や人間の心を操ることのできる「魔笛」をもらい、パパゲーノという鳥刺しを従者と

してザラストロの神殿を目指すことになる。この物語はこの後実に複雑な展開を示すことになるのだが、ここではそれには触れない。

ここで重要なことは、タミーノは、夜の女王の娘パミーナに会うどころか、それまで一度も想像したことさえなかったのに、その絵姿を一目見ることによって、典型的な「恋愛」に陥ったということである。それでは「絵姿」とはなんだろうか？ もちろんこの時代には「写真」も「動画」も「DVD」も存在しないので、それに代わるものとして「肖像画」がはめ込まれたロケットやペンダントといったものが「絵姿」と呼ばれたものだったわけである。いくら精密に描かれていても、絵姿はあくまでも絵画であり、別の言葉で言えば「イラスト」であり「画像」であり「イメージ」である。そう、もう察しのよい読者はおわかりと思うが、要するに、タミーノは「二次元画像」に恋をしたわけである。この時タミーノの心というか全身というかにわき起こった感情体験は、まさしく典型的な「萌え」と区別できないだろう。

実はこの時代、このような現象（現代であれば“二次元萌え”）は珍しくなかったと思われる。もちろん小説や劇やオペラ作品の中で描かれている出来事が、その時代の多くの人々が現実として体験することと一致していたという保証はない（往々にして、このような芸術作品のなかでは、現実そのものというより、現実のあり得べき姿＝理想像が描かれる）。しかし、それを差

し引いても、一人の人間が一枚の「二次元画像」に身も心も奪われてしまうという出来事は、この時代の人々にとって“納得できる”ことであったことは間違いないだろう。実際のところ、オペラにしても物語にしても、このような「絵姿」に代表される二次元イメージに触れることをきっかけに、深い恋愛に陥り、その人間のその後の行動が全く変わってしまうというストーリーは非常にたくさんある。これはおそらく洋の東西を問わない。

男女の立場を逆にした物語の典型としては、ワーグナーの「さまよえるオランダ人」が有名だ。このオペラでは、ゼンタという若い清純な娘が、呪いをかけられたために幽霊船の船長として永遠に海を彷徨っているという伝説の主人公「さまよえるオランダ人」の絵姿（これはおそらく壁に掛けられたかなり大きな絵画と思われる）に魅せられてしまう（物語の詳細と結末はネタバレになるので省略）。

こういった“二次元萌え”の物語に加えて、“2.5次元萌え”とでもいうべき、現代の“フィギュア萌え”に匹敵する物語もある。最も有名なものは、ギリシア神話にみられる「ピグマリオンとガラテア」だろう。この物語の主人公のピグマリオンは、若くて情熱的でまじめな彫刻家なのだが、その極端すぎるまじめさゆえに、現実（三次元？）の女性を嫌悪している。しかし彼は自分の熱情に耐えきれず、ガラテアと名付けた彼の理想を具現した美しい女性の彫像を自ら作成し、それを愛するよ

うになる。この辺り、美しい物語ととるか、キモい話ととるか微妙なところではあるが、結局のところ、彼の情熱を理解し、評価した美と愛の女神アフロディテの計らいにより、ガラテアの彫像は生命を吹き込まれ、現実の女性となり、ピグマリオンとガラテアは結ばれてめでたしめでたしとなる。このピグマリオンの物語に象徴される「自分の理想とする異性を自らの手で創造する」というモチーフは、バーナード・ショウにより小説化され、有名なミュージカルとして舞台化された「マイ・フェア・レディ」の原作となった。

ここまでいくつかの物語の例を挙げてきたが、これらの物語に共通しているのは、絵姿という二次元画像や、彫刻などの2.5次元イメージとの接触が、強い恋愛感情を惹起し、主人公のひたむきな行動を誘発するということである。この引き金を引いている現象は「萌え」と表現しても決しておかしくない。二次元の萌えキャラに対して「オレの嫁〜！」などと叫ぶ輩がいるのもその現れであろう。しかし、それが現実的な意味での恋愛に直結するか、ましてやそれが成就するかどうかについては単純には言えず、それらの物語は複雑な様相を呈していると言わざるを得ない。

タミーノは与えられた複数の試練に耐え抜き、最終的にパミーナと結ばれるが、成就されるのは精神的な、あるいは神聖な意味での結合であり、そこには肉体的な要素はあまり想定されていない。その代わりに「魔笛」におい

ては、従者のパパゲーノがパパゲーナという伴侶を得て、こちらはたくさんの子供を授かるという形で、肉体的な部分を引き受けている。「さまよえるオランダ人」のゼンタは、オランダ人への愛のために、現実の婚約者であるエリックを失ってしまう。ここでは精神的な愛と身体的（世俗的）な愛との矛盾・葛藤が、最終的に悲劇へとつながるというストーリーになっているように見える。マイ・フェア・レディの主人公である独身主義者のヒギンズ教授は、無教養な花売り娘であったイライザを自分好みの淑女に仕立て上げることに成功するが、結果的に自律した主体性を獲得したイライザはヒギンズの元を去ってしまう。このように、「萌え」と「恋愛」は密接な関連をもっていることは間違いがないが、それは決して単純に同一のものと言えるわけではなく、「萌え」と「恋愛」の“関係”は複雑かつ多義的な様相を呈しているのである。

さて、色々ごちゃごちゃと述べてきたが、それでは結局のところ、「萌え」と「恋愛」は異なるものなのだろうか、それとも異なるものではないのだろうか？ これでは結論が出ないではないか。なんでこんなにごちゃごちゃと色々考えなければいけないのか？ たぶんその答えは「この問題を考えることが、萌えの本質は何かという問題に答える鍵になるかも知れない」ということなのである。もったいぶっていないで、次節へ進むことにしたい。

## 14. 「カップ焼きそば現象」を めぐって

唐突であるが、「カップ焼きそば現象」という概念をご存じだろうか？ カップ焼きそば現象とは、漫画「みなみけ」（アニメでは「みなみけ おかえり」第1話）にて、主要な登場人物の一人である天才哲学少女の小学生、南千秋が提唱した概念である。この現象については、インターネット上でも多数言及され、その後色々な概念の変遷があるようなのだが、一応信頼できるオリジナルの定義を描写するとおおむね以下のようになる（らしい）

**「焼きそばを食べたい時」と「カップ焼きそばを食べたい時」は違う。これらは既に別の食べ物である。「カップ焼きそば」は「焼きそば」に近いものだが、焼きそばに勝ってもいないし負けてもいない。これを「カップ焼きそば現象」と呼ぶ。**

そして、南千秋によれば、このような現象は“日常的にある”らしい。さらに原作のアニメ（<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00252/v10080/v099340000000542672/>）においては、「カップ焼きそば現象の具体例として、以下の3つが挙げられている。

- 1) 「焼きそば」に対する「カップ焼きそば」
- 2) 「くま」に対する「ふじおか（くまのぬいぐるみ）」
- 3) 「新茶」に対する「ハルカが入れたお茶（実は古いお茶）」

しかし、この三つの具体例の共通点は何かという問いに答えるのは難しい。多くの者にとっては意味がよく分からない。あるいは微妙に話がズレているように感じられる。したがって、その後のインターネット上の議論も焦点がぼけてしまい、現在では、カップ焼きそば現象は「似て非なるもの」あるいは「イラストなどにおいてもともと別のキャラクターが非常に似ている容姿で描かれている」ことなどを指すような意味で用いられていることが多いらしい（このへんの詳しい事情にはうといので筆者にはよく分からない）。

当然のことではあるが、読者は、この「カップ焼きそば現象」の話と、「萌え」と「恋愛」の話に、どういうつながりがあるのか疑問に思うだろう。そう、その「つながり」ということが重要なのである。筆者が「カップ焼きそば現象」にこだわるのは、決して「みなみ家の南千秋」に萌えているからというような理由からではないのだよ（げふん、げふん）。この天才少女が提示した洞察の中には「似ているけれども異なるもの」「異なっているけれども似ているもの同士のつながり」などのごちゃごちゃした「関係」を考えるための、重要な示唆を含んでいると思うからである。

話を「焼きそば」と「カップ焼きそば」に戻してみよう。「焼きそば」と「カップ焼きそば」はどちらも、基本的には何らかの実体を“描写”している”ことば”であると考えられる（ただし「言語」の機能のうちで“実体を描写している”という機能は実はごく一部に

過ぎないのだが、ここではこの問題は置いておく)。

私達はこれらの言葉が描写している具体的な実体を思い浮かべることができる。例えば「焼きそば」ということばからは、縁日の屋台の鉄板の上で良い匂いを漂わせながらジュージューと音を立てている「焼きそば」を思い浮かべる。「カップ焼きそば」からはプラスチックのカップに入って、熱湯を注ぐと三分で食べることのできる「UFO」あるいは「ペヤング」といったものを思い浮かべる。これらの「UFO」や「ペヤング」は、決して鉄板の上で焼かれてはいない。そういう意味では、これらは「焼きそば」ではない。それは「焼きそばと似たもの」として開発され、販売され、社会に定着したものとなっているかも知れないが、鉄板の上でジュージュー音を立てている「焼きそば」とは異なるものである。さらに南千秋がいみじくも言ったように、我々が(少なくとも若い世代の多くの者が)、「焼きそば」を食べたい時と、UFOを食べたい時は異なった時である。

よって、**「焼きそば」と「カップ焼きそば」は、“同じものであるとは言えない”**というのが一つの結論となる。

しかし、別の方面から考えてみよう。ここで注意しなければいけないのは、「焼きそば」も「カップ焼きそば」も「焼きそば」という同じことば”を含んでいるということである。字義通りに解釈するならば、「カップ焼きそば」は「焼きそば」の一種であり、「焼きそば」の一特殊型であると考えるのが

普通ではないだろうか。つまり「焼きそば」の中に「カップ焼きそば」や「ソース焼きそば」や「固い焼きそば」や「うちのお祖母ちゃんが作ってくれた焼きそば」などがあると考えるのである。これらの「多様な個別の焼きそば」が集合して「焼きそば」という“一般的なもの”を構成するわけである。もともと「カップ焼きそば」はおそらく「焼きそば」の代用品として考案されたものだと思われるので、製法や食べ方や味などは異なっている、そもそもは焼きそばの一種(つまり「焼きそば」というカテゴリーに包摂される概念)であるという考え方は、あながちおかしいとは言えないだろう。このような関係は「ラーメン」と「カップラーメン」の関係にも当てはまり、決して珍しいものではない。そうすると「焼きそば」と「カップ焼きそば」が全く別のものであるということは簡単には言えないということになる。

しかしここで、「カップ焼きそば」という名称を純粹に個別名称である「UFO」などに変えてみるとどうだろう。「焼きそば」と「UFO」は同じものだと言えるだろうか？ 両方に「焼きそば」という言葉を含む「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係よりも、「焼きそば」と「UFO」の間は遠いように感じる。しかし先ほどまでの論理から言えば、それは「名称」にだまされているだけであって、UFOは「カップ焼きそばの一種」であり、それは同時に「焼きそば」の一種であると言えるので、やはり「カップ焼きそば」も「UFO」も「焼

きそば」に包摂されていると言うことができる。

そうすると、ここでの考察からは、「**焼きそば**」と「**カップ焼きそば**」は“異なるものである”とは言えない、という結論が導き出される。

さて、そうなると、「焼きそば」と「カップ焼きそば」とは同じものなのか、違うものなのかという問いへの答えはどうなるのだろうか？ ここで「オレは同じだと思う」「いやオレは違うと思う」と言ったところで、それは自分の好き嫌いを言っているだけではないだろうか。丁寧な論理的考察の結果は、以下のように言わざるを得ないのではないだろうか。

**「焼きそば」と「カップ焼きそば」は、同じものではないが、異なるものでもない。**

え！そんなのおかしいじゃないか！二つのものが同じであって同時に違うなんて、それじゃ論理矛盾じゃあないか。そもそも同じものは絶対に違うものではないというのは、論理学の常識でしょ！…と読者は言うだろう。その通りである。記号論理的にはあなたは正しい、異なるということは同じではないということであり、異なるということは同じでないということである。非 $A \neq A$ であるのは常識であるから、「焼きそば」と「カップ焼きそば」は、異なるか同じかのどちらかであって、両方とも成り立つなんてありえない。

しかしそれはあくまでも「記号論理

的に言えば」ということなのである。ここを私達は良く忘れてしまう。現実に私達が体験する現象世界のありようは必ずしも記号論理に従うわけではない。

それともう一つ言い訳をしておこう。私は、「**焼きそば**」と「**カップ焼きそば**」は、同じものではないが、異なるものでもない、とは言っているが、「**焼きそば**」と「**カップ焼きそば**」は、同じであり、同時に異なる、とは言っていない。

ここは微妙なようだが、賢明な読者諸君にはこの違いはすぐおわかりのこととおもう。おそらくこれは、私達全てが使わざるを得ない日本語という言語（日本語だけかどうかは要検討）の不完全さのせいなのだ。つまり、多くの場合、ある言語記述（命題）において全称言明（全ての〇〇は△△である）と特称言明（ある〇〇は△△である）は区別されていないということだ。特にこれは肯定文の場合に問題になる。

**「焼きそば」と「カップ焼きそば」は同じである。**という文章から、私達は以下の三つのうちのどれか一つの意味を読み取る。

- 1) 「**焼きそば**」と「**カップ焼きそば**」は（常に）同じである。
- 2) 「**焼きそば**」と「**カップ焼きそば**」は（多くの場合）同じである。
- 3) 「**焼きそば**」と「**カップ焼きそば**」は（ある状況では）同じである（＝同じであることがある）。

どのような読み取り方をしているか

は、通常言語化されないままで、私達はこのような問題を議論することが多い。だから多くの場合議論は噛み合わない。ちなみに、記号論理を前提にするならば、1) は真か偽かどちらかであるが、現実には真であることはほとんどない。2) は調べてみなければ分からず、3) はほぼ常に正しい。

これも余談になるが、医師の国家試験はマルチプル・チョイス問題 (MCT) という形式で全問が出題されるのだが、これは基本的には一つの命題について真か偽かを問う選択肢の組み合わせである。この問題を作成するときには、「〇〇は必ず△△である」という選択肢 (例：肺炎は必ず呼吸困難を伴う) も「〇〇は△△であることがある」という選択肢 (例：肺炎は呼吸困難を伴うことがある) も作ってはいけないということになっている。しかし「肺炎は呼吸困難を伴う」という文章にすると、これは厳密には正解とも不正解とも言えないということになってしまう。不詳私もこの形式の問題を作らされる立場にいたことがあるのだが、作問には非常に骨が折れる。頭の良い受験者は、出題の内容に答えるための知識のありなしにかかわらず、文章形式だけから正解かどうかを導き出してしまからである。自慢ではないが、私が医師国家試験に合格できたのは、この原則を読み解くことを身につけていたからである。

話を戻すと、二つの概念の異同を論ずる時、肯定文形式による記述を行うと、ほとんどの場合、現実を説明でき

ないか、議論が混乱することになる。そこで、現実には即した言明は、二重否定文にならざるをえないのである。つまり、「〇〇は△△でないとは言えない」といった文章である。この形式の言明は、多くの場合、現実におこっていることを説明でき、少なくとも“間違っていない”のである。一番典型的な例は、「あなたの病気は癌でないとは言えない」といった言説である。このような言説は実は意味のないことを言っているかもしれないが、ほとんどの場合“正しい”のである。もちろん、このへんのところは、筆者自身かなりいいかげんなことを書いているので、話半分にはしか信用してはいけないのだが、真実でないとも言えないからまあ良いのだろう。

初頭の議論に戻ろう。「カップ焼きそば現象」という概念の提唱がなぜ重要であるかという、上記のような「ごちゃごちゃしているが、現実には何かを論じようとする時に、分かっていないと必ず混乱してしまうこと」について、私達が考えてみるためのよい例題を提供してくれていると思うからである。実は「カップ焼きそば現象」の類題である、「くま」と「くまのぬいぐるみ」の問題とか、「新茶」と「新茶だと勘違いされた新茶でないお茶」の問題については、さらに詳細な考察が必要になるのであるが、いくらなんでも、もう読者も飽きてきたと思うので、それは次回に譲る。本節で述べたかったことを再度まとめるとこうなる。

**カップ焼きそば現象とは、“A と B は、同じものではないが、異なるものでもない”という A と B の関係を表すような現象である。**

ここで、A=萌え、B=恋愛をこの図式に代入して言い換えると、「萌え」と「恋愛」の関係は、以下のようになる。

**「萌え」と「恋愛」は同じものではないが、異なるものでもなく、それは「カップ焼きそば現象」の一種である。**

「萌え」と「恋愛」をめぐる問題が「カップ焼きそば現象」の一種であるとすれば、「カップ焼きそば現象」にあてはまる特質は、この問題にそのまま当てはまるということになる（だろう）。次のステップは、この両者の「関係」はどうなっているのかということをも、「カップ焼きそば現象」の他の類題とも比較しながら論じていくことになるだろう。

え、だから結局どうだって言いたいのか？その疑問はごもっともです。長くなったのでこの続きはまた次回に…ちなみに今日のお昼は焼きそばです（「実話」）。